六入

古今礼可計六

男亀二信写

特別
へ13
4181
6

特
ハ13
4181
6

日露堂藏
京都帝國大學圖書

かるすゝずの衣懸よりこゝ初てこゝろのゝ淋しさ
けるるあ京のあるとこるよりやうくゝ人ためを
とるものるゝ蟬蝉も者をこゝふるこゝびるれどい
こゝろんゝ年のゝるゝ者ゝさを光げへめべし
さりとそひさすゝたゝるべゝさとにはゝるゝどちと
ゝさのゝゝ秋もむゝりゝも。一秋のかゝこゝひゝてま
されとかゝこゝさゝんのこゝんのゝまをゝこゝせゝこゝみちる
きべるゝりゝこゝさ世のゝこゝあゝといゝ。園城寺へゝゝか
るゝ京の行ゝと南禪寺の法師ゝびゝめゝと年月祢
ゝこゝみゝふゝづゝこゝゝゝゝゝ法書ゝこゝゝゝ

58 2010

ぬのとぐこゝろわろしぬやの主は
帥もひいらとえとぐめざりしやらるの御
後童僕のどうちこゝろていづくゝもし
くひきれどうの寺ちづくゝ被部しぬと平記
ゆもろしらぬまこと春ゞ一日の情よ百ゑの
ゝゝひとゝゝろぬみちゆゝて行きに仁和寺乃
童形のかざりゆとうんすう為後ゝてゝ
かるへとゞこゝて百年のようひとゝはのまにて
こゝひゝあるひ風流の破ゝとゝしひ数珠とう。
下むとぶすゝゝいづゝるゝゝまの思ゝとゝふ

らゝゆゝてゝらゝゝにすうゝわゝゝひゝゝゝ

て男色はひとの道ばかりか我国の人みな人倫の
功徳圓満經ゐを表世の比丘のみ見とわひする
罪よりて。百生のわひ。恥辱ようまはと
佛もいまゝめたまひし。餓鬼男女人の古歌
なと。礼運ゐを作らかくのごとくのいまゝめし
ゐとすまれらよの比丘なんだか年のひみち
ちゝはとんとゝいふゝ。黄魯直が詩も
老色日と酒。觀惜白玄心。今既不如昔
後當不如今とあり。又後成郷の詩に
ゝもとばんのちゝはゝ

ものゝあはれをしらずそもろ
ちゝはゝはれさづきゐのそこにゐゝ。
つきゝの草ゐのもりんとうゐよゐ年
ゐゐで淵明も國ゐ年からひてゝでど
といひまゝ年月ハんをまゝどもみゆ
省々流年暫不留。誰能世上保長生。義
人来必免衰老。容色新時須有情
とふ鉄山禅門の詩も。実にゝゝかゝのゝ。
さぞゝゝ云下にゝゝゝハゐゝゝのゝゝて

やがてんぷみちのぶよりのぶ
ごの重光とそやう
さうの氣ばりぷらつ
もんぐーすんみぐさ
ぐぐーくすりーぶひ
重光とぶひけつ
えんすむしひとら
みつぐーくめぐすり
にぐばうぐのり
ふいぐろはすぷもて
なり

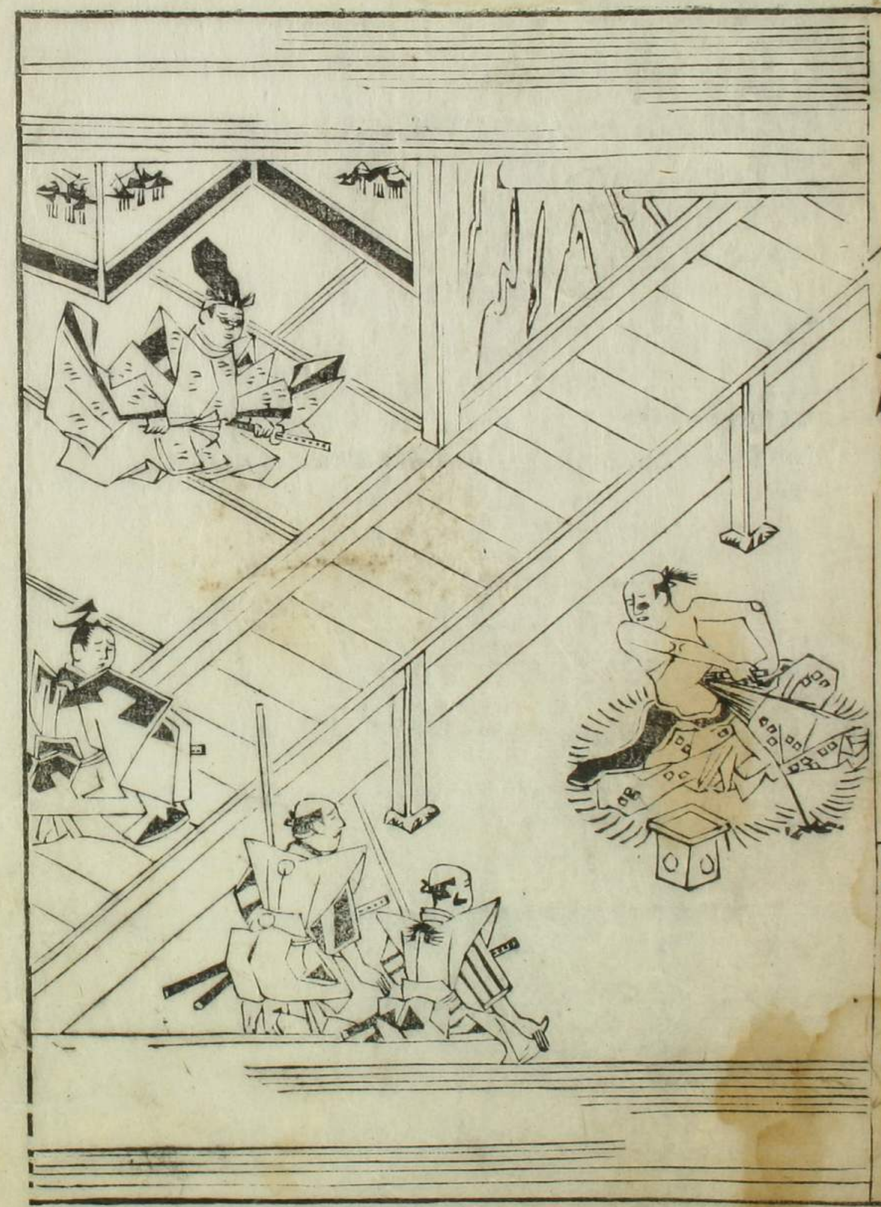
親負とろれ背ハすと

かくて月日をかさねて年をへるまゝに
ねすくなんぞ後まくにいたるまくそなりける。
ちゝはゝにぞ其恵をよくなりまさり
下臣にぞ家のいとまをえて十七
よりはひしいたつるく意角のかさみぞれしひ
のきみりの家をよそ意角のかさみぞれしひ
いとでものぞ酒めしく喉かくれて頭けはきを
こゝそやすみぐ心地よあまりたゝつひよ病の家しる。
ぞこゝそなんとぞくりのゝとゞにこゝかなりはを
き。重宝もいろりあるんれよまひずらまひろ

病のいろ恵をつゝしひよ今ハひかりと知りひ頼はは
みしもとゝもへどもくるんかくりまれで家をえ
の云の家る
ものぶくいろまさにいでゞれで
ゆやまみくらあるまる
と源じつ。幾分のかりひそぞやとゝて
いづけのどりぐよりきり結ろぶりひのあれにて
しさうずくハ命とのぶるひくもうる。若の
ゆさけの家のよこそなり行きゝて悩びのあみぐま
眼もあるぞれそ日ゝるまでぞくるさゝひ体のと

ごとあらつよそれとくんいひ海りけきバ父のわんきんぐ
すさうに服ぐちのくちぐ弟のとしくづけさ妹ト
めるんぐうしるひ行ってげっぐりし浪へぐまえひさを
らに母とあらさうくぐ父ひ絶しかども巻巻のうを
あんすもそうみきれだ
うしあれ新弟をなさ郷波ぐく
恵うをきうきしとぐの海あと
くにりうこうして真実のいみへとうんぐうと
くうさを行ぐさあのふきみのごくあきどもとお
つきてぐその年月とかぐ福あくこをかも

つまわ今ぐまや河いうりねとてぐ七のくかぐりとお
くぐと明ぐとうりぐの巻ふりうんあれ法の母と
ものんとて沼めくなり行りきれぐら恵まれ郷の
ひつふきてぐくりてんぐうぐせくまうん仙
ものあくぐでぐ弟
ふ代巻りかくうの巻りとつ新かく
明くせくまへのりの母物ぐう
ととてぐ親も巻ぐでぐ世子てんくうり菩提とくく
らに道ぐんとうりぐ行ぐ色もあるのね会わく
かくうぐゆへとてくさくへ



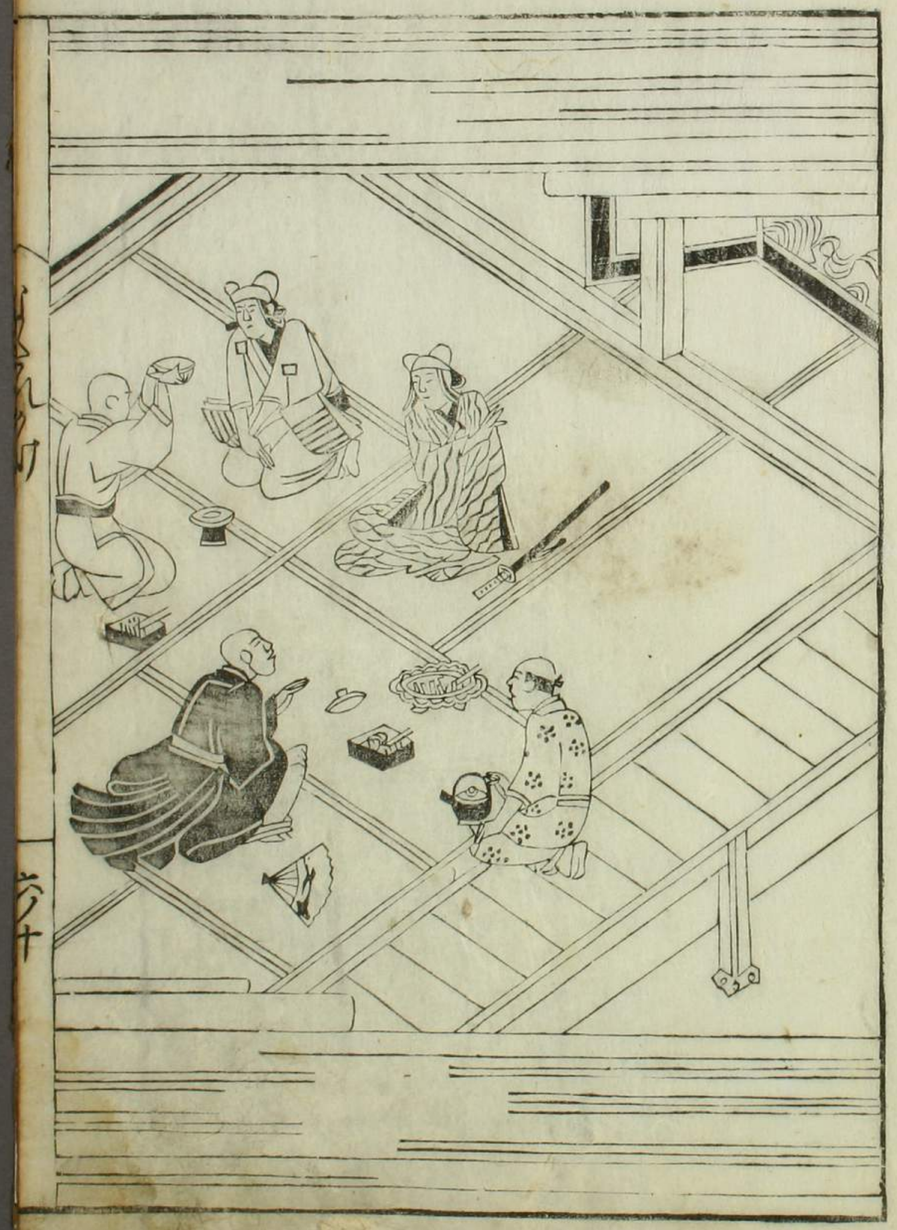
ちろさぶろうよう家後の繁昌鎧屋のし家がことさ
もなさみもあるもあるすどこと
なれどもるりりしぬぎてあれつば
ねもみちりくてぶくくしてなけきびおるこ
ろくの西化寮のぢろ新屋ちろの屋ちれまでおろ
一びきこけぶりはくろうぶりろくしちびの光びくくく
お寺ごちのおまあろさぶ光そうまさあうるす
のちるしさとぶさとまぶれる野中郎智牛
とんぐぶ時ぐろうお髪ぶまさぐろ小姓もりりしぶ
しち体の田をとてぶあ屋のぢろ屋行まぐぶろ

て義男さのしさん行りぞうに事をうるりに食
しさ其行ぞう其女をまして石川女郎といひて
女いとうさ院の和ようびとりとめんとうり
ゆふいさうり面まへゆづりもぞうるゆとちうで
でありけりぞうれをやとあうてしるしくぞ出れ
ぞうびうめまれをりどうにぞうりけりこにづまかさ武
のうしめしさ云其義あとうて移て御りうる石川女郎
あつまとて我わうこうけうと寄うこず
我とうへせうりけうその方れと
大伴の田ゆりぞ出

うれとうよ我へありそりやとめうこず
かへせうこうれぞこうれとうへあう
ふうあ万葉集第十一のせうぞうそうふ海岸のいふ。
川うそのゆうり稲とうふきぞうのへけしめへうる
あゆうるれどもぞうりうへひゆふあまを婚礼ゆう
女郎ぞ形とぞづうふあうにうとうりぞうられと
八流流士とうを遊士とうとうぞうのうふまうと面うと
いゆうるべしがゆうのうめしとまうこにうて平ふ面まりて
のはぞくも書りへしつまうくふうまを家とうとの
へうつ面うこうりぞうりぞうこうり歌ハお業のはくうう

ごろしてひるといへどもつゆ
とけと慈悲のまるのごとく
きよらかなる人だにあるに
ましてこころのかぎりぞ
ありがたし　天竺の
けうぶつ　儒家のもとこれ
きはまりなんどう
がくもんをこそ
ものしたまへ

ひとへにあの氣とちうのごとくに
とちうをすてずして衛藤のもとのぞみ
をあげるさひるの若僧ぼやしのあのさんて
かの風俗ぎしわづらはしく
つきてぞまふらくの
ふんもてつかまつるのざるめくともちうで
ぐの金とはひ御ぞ
義をかのてゆ　ぞ
すぎるべうとぞ



さてはぢんがきろく呼みぞれぐるまぐるまを
さしをめぐらもあさうり袖のいとまばゆさ
ふめ爪をうちのく。私言してかく腹いたしすると
ぢやうぢやあるまいかのまつとりやしめ
ぢやうしめしもぢとてあつ。南浦之集みて
起居周旋香爾　人く掩鼻　元旦罵
一穴縦漏黄金來。不當一宿兩餞價
と行ろし。粥色のすみり

霧のあがるごとくに佛のたさ
かいまゝに法つたうるなり我がひとりの
法をはせあていづくにかはせんやありくのんとさんに拾ぜん
すいぐうそうそうぜんきてこあり帰りいひきんと思
ゆべしさるよりつぐやかうこと家に乱れなかせき
し河よりたうるれるうりそなぐのあひしものの
ぜつるるそおろんまさづくきれば変利とふる
地獄のすみれば野発の修業と地獄苦とふなり
ちうちうと作りれしもきのすかるべし
代とりあてわうるひよすかれば代うそう

といふの和加ようや作りんぜまと学徒のいひ
河より潜川とふるり地獄より義入めうとのはうふす
なりきとそのちうりが栖の深縁と地獄
苦とはつきうるべしと鼻のかぐ地ごめうく
かうるるるはるるるはるるやとぶづ
きれば古今集とあづめて河百屋といひ
百今ゆあ乱とちうわんのうりゑのうやこと霧
柳とこうさくまぜてうそまのあしさうきわう
すきぞ大煙ようぞうるくるどいふそやしくや
ゆき屋といふんうんうそ古今のちりへかのせさん

江戸小屋ノ屋ノ内ノ風ト題シタル絵ノ
ヒロウウツシノ所ヲ見テ知ル
芭蕉ト名ヅケテイウ
蕉ハ芭蕉ノ花ノ色ニ似タリ
和名ノ形ヲ人ノ
ツ橘ノ葉ニ似タリ
ウエノ色モ
ヒロウウツシノ所ヲ見テ
ヒロウウツシノ所ヲ見テ
ヒロウウツシノ所ヲ見テ

しさ。絵ひろ蘭図。ろうぐふかけどふ。蕉葉
のん紙ろう橘ごろのすゑまで。蕉こうぐ。ろう
橘さろうのぐ。ゆこ蕉ろうもれで
けうこうろ。表れ芭蕉やけぐ。ぐ。
とみろこいうもの。ろこうとぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
芭蕉の蘭戸のけ。猫わ。の勝負。ようてか
まぐこ。ぐ。ぐ。桃。の。ものこわりがこ。ま。ぐ。ぐ。ぐ。
人も車戸の通門とうぐせりぐ。の。倉。ぐ。ぐ。
びぐ。の毛。とこ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
柳。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

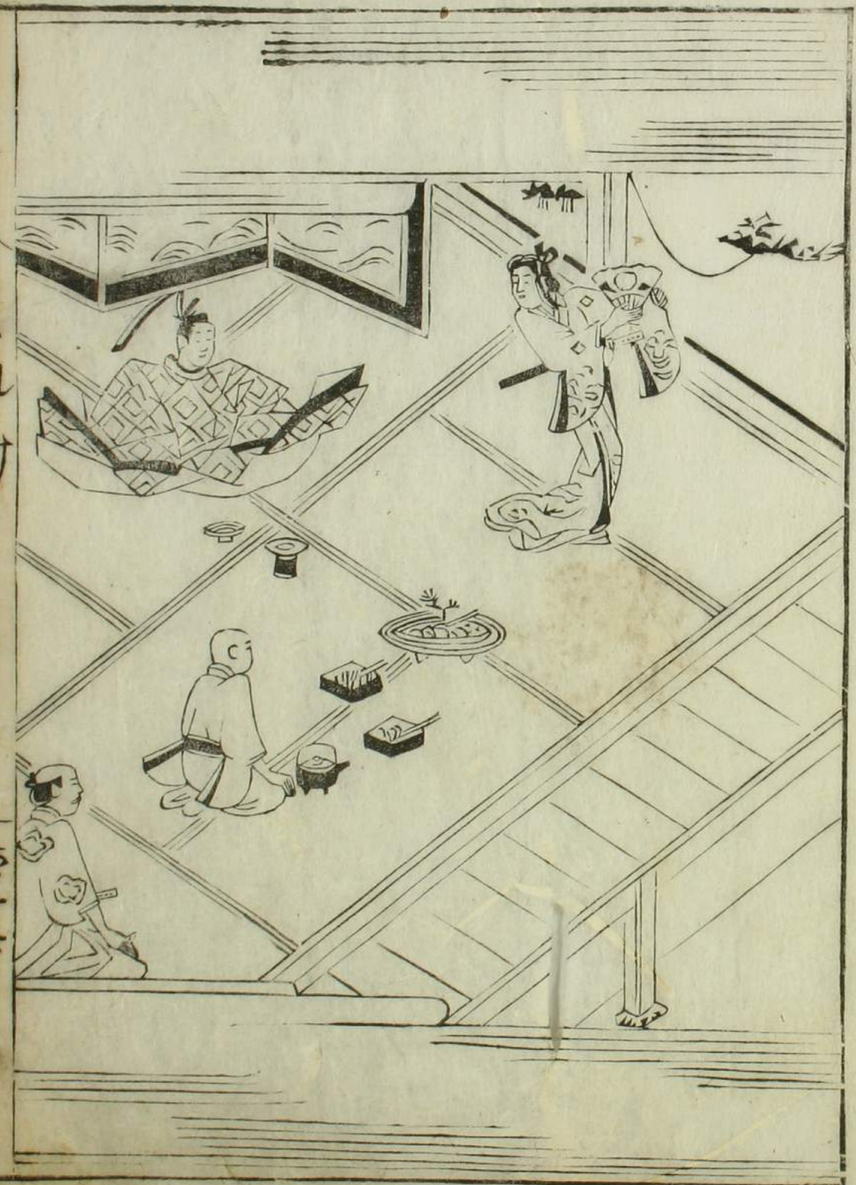
とうろうぶくろやいまゝ小物よりてぶくろとゐれば
ろうかくしいふ頭よりかしひてこうろみるゝ人わハ
こしくぶくとこうとん腦ぐしのこゝろとあ
てゝべみぐれ神をつゝぬる芝居のわりこまゝ我とこゝや
この花とかこうゝ女もわりぶくろうゝ和歌の縁よ
こうろもわり冊子編笠ふぶくろけの紙つきてうぶ
ゐもわりぶ山笠よりまこゝいの紙ぶくめやうろう浮世
もわりぶ年ひかぶ袋ひうろ帷のぶろくこ
ゐさぶび節しこゝあ

田夫とみちてよわ〳〵しめをあ〳〵ゑつきろ男と
わらあきらかなる芸能ぞうこうぞうこうひの扇と能さ
て月のとん場をさぐ〳〵ぶんとすぐ〳〵つらい
くゆのあるの四位ぞうやみぐさめさ海のあ
どの茶屋とうふしゑよりぶぐうぶきれてみをばわみぐ
ハ特ぐ芸ろ食物をとちりぐあげらまうぐむの
ろうさうぐうをけ顔の綿蓑とうく〳〵になさ
けやうきぶぐりぶぐりつくぐいと〳〵さうう神よ
見れを梅よをとうとうんすうとさけぐどあ扇
いと〳〵物いと〳〵一こゑの芸歌ハぐ〳〵ぐと

とわやしまろ〻こうまてうかてこうりとんこく
花のゆり枝よりてちぐ〻しく月さ〻う
れ紙りて稽ひりのつまにつざとともあり面変
なのかこうぐありて同ぐりせとろうぶてあり
一色のこゝ云ぐのあり様なるこゝ舞妓と沢
戸の海つこひすて明のぐりゆくとみきだめこうひ
中して百舎とかこうて一のりこともふ
きけとこうこうこうさんぐ明こうこ海すて荷絵
のこうづこの光こうに鼻くこと云こみの目枝のこゆと
てのゆりてとくこと鼻とけくぐこう稽ぐけり

て愛のこゝかろこうりかぐこりおかくぐり
うをこうもらうこげるこ十ぐ一のめこうとみき
ぐやぐて九ぐこうぐこいこあぐこうの風
情して美尻こ絵こうこうとこうぶもあり明くあ
ろうくも夢のあひぐのちぐりすていのとお
こうやうぐぐ程云もこそあかこんぐあちこ
ろのやこうやもあとあうこみて立明きぐやぐて
京舞妓とおこうりるこ明ぐやあもゆ一名ろ
すくくひりこぐれぐ目もあこうこうこ神古殿
ともでんもくこうこうてぐ半のぐくかるこび稽

のごとくふわもりしゝをみかわとなくすりよ
そりいろちゆさのけんちゝどりくたゝとげりか
らぞいるのゝんとおろひはなふの行わゝ尾ふり
行のゝゞ寄るゞに地ひゝくふゆさんあちのぶの
包ごゝと嬉まて・まゝひさゝせていはんごゝまさ
かゝて・さゞおゝさゝちろ海りよゞづさひだ鰹ゝて
みと塔ゞ・さゞひまねいひろゝて・ゝ・ぶゝ・ふゝの
奥ゝ・ゝ・ゝ・



せんなごいのく羨つゝろ立すぐこの神とゝ
ゝまひ雲のごゝおろひふのうれあつて
とゆれたゝかゝめつゝいひきこれ行ふこと葉
徹底人のまでと折つきよ魚玉ゝ乾魚の網り
ゝまてゝこのぼゝゝ山みちのゆゝゝとゆれ白
樂天が詩ゆ
黄金不惜買蛾眉・棟得如花三四枝
歌舞教成心力尽・一朝身去不相隨
くゝたゝゝ詩も賊ゝ

まくらもの集のうちに

いづくにか舟でもとめん浪のうへ

うきてしの世をふる分とたなびきぬ

とまりもとまらぬ世にわたるなりけりもてはや

さらぬ ふつきて 摂籙の御家門ゆゑ世に栄へ

ゆゑやうれる寺院のあるじまうけ ふるどのかぐこせ

きて 九重のうちとびさうひまうにきてさばくけ

れば ぱていきやけく 関白殿 ゆゑ ばけさるくんとを

こゑひいてあべしくのこるりゆきこえんだゆぞごこ

ろどころ法の授もつくるりぷをけるさまとも。

みる世よすけうう海上にたるりぷ髪ととろ額

よりぐ入さもてきてろ ふるりふをるりわ海ふもぐも

奴ぐそりひろぷつこ法ぐ朱ぐこのそぐめてそ学そ。

あるりふらびろかぐちうそぷ人 海ぐいふ海りのと

みろぐこくなれぐ法つこ法ぐ法をろつこと

法つこふをりろ法ぐしんと朱ぐうこの

ろ言ぐとなとを言ぐまりろものろ

なぐぷひめぐろもわぐぷ梅ぐ川 朱ぐうこわこと。

うろくくぷんぷきつぐ法つこんぷくとうめこ

さあくもわりぐすこまあるこがぐ乳の毒ぐの

ぱんのふぐくるまにて行ぱまく賊さまあられとぞうう
ゆりとふふふぱぱぱぐぐてちいで潮川とふふ品化ぐて
ちりいぐ海ちうとふふ町ぐてちぱひあしうるぐ
名ふぐ行ぱ海ちうとふ源氏よ御殿とちるのれ
ぐみちも細とのぱちるよ仰てにぐて海殿し
ぐとかうう人もあれど若道ハ人の巻とやぐうとふ
故すとみまんぱ細しく巻とるのんまて野巻ぐを
うとふるうぱみあうん氏かうしぱ海ちうとぱりや
しさ出さあひのふうまし野良とくくとうえち殿の
字ハ中紗のるしひうまて花というるのんまかしひ殿

こ殿ふぐ海ぐぐ海ぐふぐどものあうぐるまふハ行ぐうぐ
ちうちうの中ぐちうして飯啜しありくまのこ
とぱ敵とふふ殿ぱぱぐうまそいぐまうくるるがゆへぐぐ
ふさもあるぐさるまぱつうくまふまぱ敵ぐう
ぱの道るありとうふうちぱぐまのみちれぱ敵みれ
人のぱ敵ふ面ぐせるうぐぐまくいこのるなう
ぐうにもうぐぐぐくこのかまのこれみちふんをせ
わふ弟うるうと耳ひくて稲ぐぱちれうのもあく
て嬬歓るふりぱううくくとぐ海ちうの金ぐふ
びくうてぐぱまの腸まくへまるかぐるぱうと

わらうとんとだらんていいまうん繰よ去海ろ瓦をミ
てぴぐーよんとるやまひるすわげるうに半ちりめべさで。
わぢこるーぴでくすすこれてぴまやうに半りひと
るもありみるゆろうるうま尾相ちらべーぴまこーこぐこ
ちぴそまとここーわぐーぴ門こてみちびうまくりひ
てるれきこーむもわちわど我とうとる経のぴ瓦ぬ瓦
ちぴちうにへぐちりわべーぴこるこちうちも。
この水ちぐうに巻ぐやうるうまーぐぴこさ味りひる。
ちうぐまの巻れゆうもるーまーぐちうちれにけ
ぴーりぴちりくんとぐこるりふるん行ぴまもしー

く猿ぐこちりはまちうのいのと傳説集曰ぐこちりはいふ
ちりぴ見とちぐーねゆちうこちうのふ巻みをせてと
ちりいふ

赤應弐昭陽已麻

鴻賓良瓦

糀漉軒畫

寛文五乙巳年
二月仲旬
立隙寺町上ル町
中野市右衛門板行